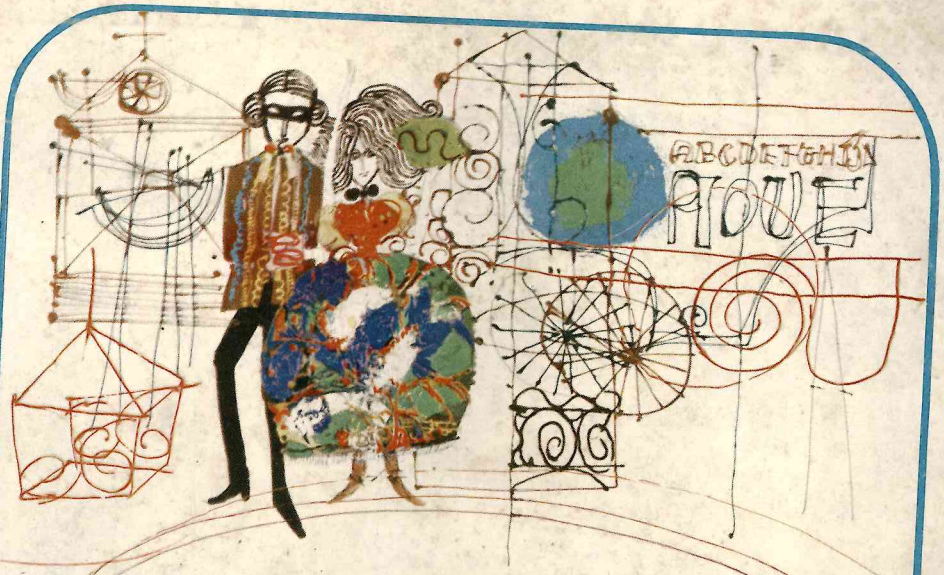
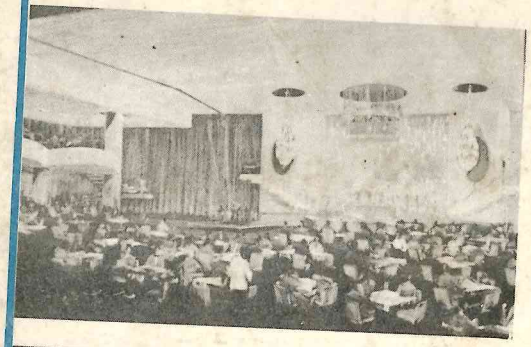
春の日

第三号

昭和三六年十月一日発行
春の日
第三号
定価 二五〇円



世界の夜がやってくる



ショーと食事を楽しむ
レストラン・シアター
ミカド
東京　赤坂
均一料金　¥2,000
・10月10日開場
・予約受付開始　9月25日
・TEL　(481)　1101
・詳細は予約係(島田・伊藤)
にお問い合せを

3 日の春

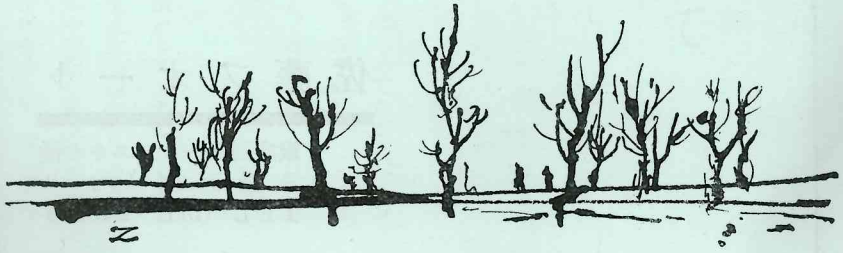
ラーイスの手鏡に添えて……呉茂一 7
美と醜のあひだ(3)……浅野晃 22
青山熊治……小松清 10
ベルトラムへの手紙(3)……芳賀檀訳 15
徒労の辨……北条誠 32
歎異抄の寺……吉野秀雄 35
窓……宮崎智恵 31
紫雲の空……大伴道子 31
「金瓶梅」を読む……田中克己 38
人生への復讐……青山虎之助 40
思ひ出す人々(3)……正宗白鳥 42

表紙・サム・フランシス
カット・向井潤吉
利根山光人

☆外村繁の思ひ出☆ …… 47

川端康成　富沢有為男　伊馬春部
尾崎一雄　蔵原伸二郎　上林暁
川崎長太郎　浅沼喜実　北川冬彦
榊山潤　小田嶽夫　木山捷平
福田清人　浅野晃　八匠衆一
古谷綱武　野村吉之助　今官一
松井勲　頼尊清隆　平林英子
浅見淵　伊藤佐喜雄　小野稔
淀野隆三　稲垣達郎　外村てい
亀井勝一郎　河盛好蔵　外村晶

日本文学史話(3)……佐藤春夫
……暉峻康隆 112
吉田精一



金瓶梅を読む

田中克己

わたしは中国文学が好きで、その教師になってからでも十年以上になるが、水滸伝や西遊記とちがって金瓶梅と紅楼夢とはよめなかった。紅楼夢がよめないのは、源氏物語と同じく長すぎるうへに、退屈だと思ふからであるが、金瓶梅の方はちょっと違ふ。

わが文学の神鷗外先生のキタ・セクスアリスに、漢文の先生である文淵先生を訪ねて「机の下から唐本が覗いてゐるのを見ると、金瓶梅であった。僕は馬琴の金瓶梅しか読んだことはないが、唐本の金瓶梅が大いに違ってゐるといふことを知ってゐた。そして先生なかなか油断がならないと思った」といふ箇所のあることは、ご存じと思ふが、実はこの箇所がわたしの小心にひっかかったのである。油断がならないなぞ思はれてはかなはないといふのが本音である。そのくせ隔簾花影や痴婆子や、肉蒲団などはちゃんとよみおへてゐるのだから、人間の心理なんてふしぎなものだと思ふ。

金瓶梅に手をふれる機会は何度もあった。私のもとの勤め先には明版の「新刻繡像批評金瓶梅」は当時まだなかったと思ふが、ただ京都の某氏蔵の満文金瓶梅といふのが、わたしの手を経て図書館に入った。これはちょっと検したが、全訳でないとはわかったし、満洲語の勉強に金瓶梅をつかふなどはわたしの学的趣味に合はないので、早速、書架に入れ、その後は手にもとらなかった。（いま関係者の某々氏らが研究中だと聞く。以上の意見に間違があれば正していただいて結構である。）

さてそれではどうしていつ金瓶梅をよみ出したかといふことを話すとなれば、理由はわたしの老年である。わたしはすでに鷗外先生より老い――キタの制作は明治四十二年、先生四十八歳の時――この小説中の文淵先生よりも老いた。いまさら色気でと思ふものもあるまいし、わたしの講ずる大学の中国文学史は概説ながら、金瓶梅の中国での代表的小説の一であることを述べるうへ、終戦以来の高等学校の教科書にも、その名は麗々しくかかげられゐるのである。よまざるを得ない。

本郷湯島の聖堂に設けられた古書肆にゆくと、あるある真本金瓶梅一部三冊！　これがいはゆる削除本金瓶梅で、いやらしい箇所はみなぬいてある。値段も安い。さっそくそれを買って来て夏休みの第一の仕事によみ出すと、効果はあった。

わたしの近ごろ関心をもってゐるのは、わが国人の先進文化に対する異常な熱注が今までどういふ形であらはれたかといふことである。ブギウギ、ファッションへの傾倒はいまにはじまったことでなく、これがどういふ風に積み重ってゐるか徹底的にしらべたいと思ってゐた。これがはからずも金瓶梅をよんでゆくうちに満たされた。たとへば淫夫西門慶が淫婦李瓶児を娶るのは五月十五日のことであるが、そのすぐ前、端午の節句には、彼の家はもとより家々ヨモギの葉を門に挿し、霊符を扉に貼り、ちまきを食ったことが明記されてゐる。また西門慶の死後、この小説中第三のヒロイン春梅が、彼の女婿淫夫陳敬済と交歓の一日が五月五日端午の佳節で、春梅は孫二娘に陳敬済を加へ、雄黄酒をのみ、ちまきを食ひ、音楽を二人の侍妾にかなでさせ、孫二娘が酔ひつぶれたあと、侍妾たちをしりぞけて、佳境に入るのであらう。真本金瓶梅にはもとより佳境は略してあるが、尾坂徳司先生の訳や小野忍、千田九一両先生の訳には、ちゃんと完本によって全訳されてゐるからおよみになった方が多からう。

これが病みつきになってわたしは拍案驚奇、二刻拍案驚奇、醒世恒言など、いはゆる三言二拍をよみおへた。みな明代風俗を知るためで小説のこくや細部などは語学その他で未熟なわたしの説けるところではないが、大いに勉強したやうな気持になってゐる。成果はいづれ専門の雑誌に書かしていただくつもりである。

思へばわたしに中国小説の愛すべきを教へて下すったのは、春夫先生であって、三言二拍の抜萃である今古奇観について、お宅でお話をうかがったおぼえもある。金瓶梅をこの年齢になるまでよまなかった鷗外先生と対照的ともいへよう。

アームだけで通話できる！

トランジスター

パワーフォン

携帯形電話機……とは

送受話用ユニット・呼出用ブザー・トランジスター増巾器・電池をアームにコンパクト内臓しているので2つのアームを電線で接続するだけで簡単に話せます。感度も30km遠くのやかましい所でも楽に話す事が出来ます。——電池は単三乾電池1本（25円）で半年使用できるので家庭・事務所・工場・工事現場・学校・病院等の連絡用に最適です。

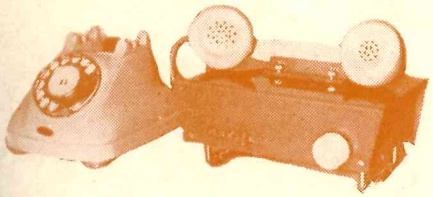
・その他交換機なしで相互呼出しもできる連立形・連立放送形・親子形などトランジスタパワーフォンには多くの種類をとり揃えてございます。

手放しでお話できる！

トランジスター

オーディホン

オーディホンは従来の電話機の配線、機構に全然手を加えることなくただアームをその上におくだけで受話音を拡大スピーカーを働かせることのできる拡声通話装置でお仕事をしながら通話することが出来ます。また、ラジオ付のものもあります。（公社公認）



東洋電機製造株式會社

東京都中央区京橋3丁目4番地

春の日　1・2号の執筆者

正宗　白鳥　　山本　健吉
井上　靖　　三浦　朱門
安岡章太郎　　芳賀　檀
庄野　潤三　　浅野　晃
源氏　鶏太　　柴田錬三郎
和田　芳恵　　青山虎之助
田岡　典夫　　蔵原伸二郎
木山　捷平　　沢田　卓爾
林　富士馬　　吉田　精一
山本　太郎　　東野　芳明
丸岡　明　　高田　博厚
小田　嶽夫　　伊藤佐喜雄
利根山光人　　中谷　孝雄
佐藤　春夫　　向井　潤吉

編集後記

誰が何と云をうと、創刊号に佐藤春夫先生が書かれた「創刊の言葉」は名文である。ひどいことを云ふやつは、あれだけでも〈春の日〉を出したネウチがあると云ふのである。

先生は、その中でこう書いておられる。〈我等は終始一貫して同人たるを誓ふ者ではない〉と、君子豹変のことを云はれ、来る者を拒まぬとともに、去る者は追はない方針も示された。

さうして、〈「春の日の会」の会誌ではない。況んや小生の個人雑誌でもない。〉ことも附記されておられる。

巷間、〈春の日〉をめぐって例に依って、物好きな文壇ウワサ雀の私語がきかれるので、重ねて先生の言葉を銘記しておきたい。

＊

この号の大半を、創刊発起人の一人であった外村繁の思ひ出で埋めたため、予告して置き乍ら、次号にずれた若干の原稿あることをお詫び申しあげる。

＊

又、この号の校了を前にして宇野浩二先生の訃報を知る。先生は、この春の病中、「すこし調子がよくなったら、電話をする。さうしたら遊びにおいでよ——」と云ふことづてで、この春の日についても力を貸してもらうつもりであったのに、残念である。先生のことについては改めて特記したい。

＊

表紙のサム・フランシスは、好評なので、後一号使用する予定で、次は在パリの荻須高徳氏である。

＊

次号では、この誌の画期的な発展へのプランがお知らせ出来やう。

〈春の日〉友の会
入会希望の方は御申越下さい。規約御送りします。

★本誌購読の希望者は、直接本社宛、誌代
半年分（概算）一五〇〇円
一年分（〃）三〇〇〇円
御送金下さい。

★本誌は一般書店では発売致しません。

春の日　第三号
昭和三十六年十一月一日
編輯兼発行人　伊藤佐喜雄
印刷所　旭印刷株式会社
発行所　東京都港区麻布今井町二七
株式会社・春の日社
電話（四八一）三一八〇
五七八三
振替東京五四三八〇番

本号定価　二五〇円